柳中便り

平成３０年１２月４日（火）２５号

能登町立柳田中学校
校訓：「進取」「協調」「努力」

11月26日(月)から　3年生の放課後学習が始まりました

いよいよ入試シーズン。３年生の放課後学習が始まりました。１６時から１６時３０分を基本とし、入試問題集を活用し、以下の内容で取り組みます。学習効率を上げるためには、５０分学習して１０分休憩を繰り返すとよいと聞いたことがあります。時間と学習内容を決めて取り組むことで、集中力がアップすることが考えられます。時間を意識して焦らず取り組む力を身につけていってほしいと思います。

放課後、お迎えを待ちながら１８時近くまで勉強する３年生の姿もあります。進路実現に向けて、支援していきたいと思います。

月	火	水	木	金
数学 三輪（本間）	国語 上田（小畠）	理科 東出（三盃）	英語 白坂（末田）	社会 坪岡（東出）

11月29日(木)3年生　社会科授業　投票の大切さを学びました

３年生は社会科の授業で模擬選挙を体験しました。

能登町選挙管理員会の方々のスライドによる説明やクイズで選挙制度を理解しました。その後、実際に投票会場を再現したランチルームで、投票を体験しました。模擬投票ではあるものの、ドキドキしながら投票の大切さを学んでいました。

社会の出来事に興味をもつきっかけとなったことと思います。

11月30日(金)1年生　家庭科授業　和食の魅力を実感しました

能登町中学生食育講座で美味しいダシの取り方を学びました。講師は百楽荘の料理長の坂本さんです。

体験が大好きな１年生は、終始笑顔で主体的にだしづくりにチャレンジしました。坂本さんに作っていただいたお吸い物をいただき、だしのうま味を味わいました。試食後は実際に昆布と鰹節でダシを作りました。最後に坂本さんからいただいたプリンを頂き、大満足の様子でした。

健康面からも世界から注目されている日本食の魅力を知ることができたことと思います。

ご家庭で子供たちに作るチャンスを設定されてみていかがでしょうか。学びを生活に取り入れるよい機会となることと思います。

各分野で活躍！のみなさんです
おめでとうございます

自分の可能性を広げる機会を大切にして、チャレンジした結果ですね。すばらしいです。

人権作文コンテスト
　石川県大会優秀賞
　　３年　青木　華子「相手のことを考える」

人権作文コンテスト
　地区審査会優秀賞
　　２年　水端　夏連

児童生徒切り絵作品展
　入選　３年　白崎　陽花

平成３０年度ＪＡ共済中学生書道コンクール
　入賞　３年　横山　慧秀

北国スポーツ賞
　３年　藤村　真妃

第４６回千代女少年少女全国俳句大会
　入選　２年　佐野　来夢
　　「じいちゃんのとれたて野菜夏届く」

石川県児童生徒作品展
　入選　１年　柿平　冬芽

石川県児童生徒科学作品コンクール
　優良賞　３年　上野　紗衣
　　「回りやすい風車の形」

鳳珠郡図工・美術作品審査会
　金賞　１年　柿平　冬芽
　銀賞　３年　青木　華子
　入選　１年　辻浦　友希乃
　　２年　正木　悠翔
　　２年　上野　心葉
　　３年　上野　結佳
　　３年　白崎　陽花

全能登新人陸上競技大会

１年男子１００ｍ	３位（13 秒 12）	浅井龍之介
共男子２００ｍ	５位（26 秒 55）	浅井光太郎
共通男子砲丸投げ	４位（8m69）	中村　　司
	７位（7m78）	岡平　斗希

12月の行事予定

1	土	ノー画面取組開始中～６日
2	日	
3	月	
4	火	評価問題 人権週間～１０日 人権コンテスト表彰式16:00能都庁舎3年青木
5	水	全校集会 校内研修会⑩
6	木	期末テスト
7	金	期末テスト 3年卒業証書和紙作成体験②
8	土	
9	日	
10	月	*私立推薦申込校内締切 *石川高専推薦申込校内締切 スペリングコンテスト取組開始 家庭教育研修部会18:30（集計）
11	火	広報部会18:30（校正）
12	水	職員会議⑪
13	木	新入生保護者説明会18:00
14	金	
15	土	
16	日	
17	月	保護者・生徒アンケート実施 *校内推薦委員会（私立・石川高専推薦） *航空石川推薦出願開始（12/17～1/15）
18	火	
19	水	1限目スペリングコンテスト
20	木	
21	金	３限掃除・終業式 ４限学活 ５・６限ワックスがけ
22	土	
23	日	
24	月	
25	火	保護者懇談会・三者面談 ＰＴＡ広報「柳星」第２号発行 公立推薦申込校内締切 *私立一般申込校内締切
26	水	*私立・石川高専推薦出願校内締切
27	木	
28	金	
29	土	
30	日	
31	月	

文化祭作文　～その3～

この経験が、僕を強くする　　三年　　山ノ内　憂飛

「見ている人に感動と笑顔を。」これは、僕が開会セレモニーで言ったことである。わざわざ会場に足を運んでくださった人達に、「来てよかった。」と思っていただけるようにという思いを込めて言った。

今、終わってみて率直な感想として、笑顔は120％届けることができたのではないか、と思った。理由は、今年の柳中祭は会場から笑い声が絶えず響いていたからである。各学年、先生方はもちろん、保護者の方々からも笑い声が聞こえて、笑顔を届けることができたなあと実感した。一方、感動という点では少し欠けていたかなあと思った。なぜなら、合唱ではまだまだいけたと思ったからだ。三年生としてもＭＡＸではないことを感じた。ただ、悔いが残るということではない。三年生の合唱を聞いて　涙したという声を聞いたからだ。本番は、一番いい歌声ではなかったかもしれない。しかし、神様は見ていてくれて、今までやってきたことを聞いてくれている人の心に届けてくれたのかなとも思った。この二つのことから考えれば、柳中祭は大成功だったと思う。

僕は、この柳中祭を成功させるために、準備の段階から頑張ってきた。そんな中で学んだことが三つある。

一つ目は、団長として迎えた体育祭と生徒会長として迎えた文化祭の違いである。どちらもリーダーとしてということには変わりはなかった。しかし、体育祭は部活のキャプテンと同じように「声を出して！」など、指示の声掛けをするというものだったため、今までと同じようにまとめることができた。しかし、文化祭は違った。ゼロから創り上げていくにあたって、意見の対立は必ずあり、一つのことを決めるのにも時間がかかった。もちろん自分だけでは乗り越えられることは少なかった。そんな時は、代議委員や執行部の力を借りることも多々あった。一つのことを全校生徒に伝えるためには、まず代議員のみんなに伝える必要があった。そこにも難しさがあったと思う。

二つ目は、文化祭と体育祭の違う点だけでなく共通点があることにも気づくことができた。それは、しっかり、全体を見渡しつつも生徒一人ひとりを主人公にして、輝かせてあげるということだ。生徒全員がステージの上に立ち、注目を浴びることは難しい。しかし、ありとあらゆる場所で頑張っている人たちがいた。劇では、音響や大道具など主に裏方にまわった人たちだ。「この人たちがいたからこそ」と、気づくことがその人たちを輝かせることではないかと考えるようになった。

三つ目は、早めに準備をすることの大切さだ。生徒会長は文化祭のお知らせや挨拶原稿などを提出しなくてはならないものがたくさんあった。「一日の遅れは十日の遅れ」とあるように、文化祭の準備をするにあたって早めに準備することの大切さも学ぶことができた。

中学校最後の文化祭で最高の思い出をつくることができたと同時に多くのことを学ぶことができた文化祭になった。

「役」　　三年　　本井　蒼空

今年の柳中祭を漢字一文字で表すと「役」です。その理由は三つあります。

まず、一つ目は、運動員会の委員長としての「役」割を果たしたことです。意見発表の見所紹介は、言葉をちゃんと考えていなかったので、めちゃめちゃ噛んでしまいましたが、司会の仕事は、しっかりと果たすことができました。目立ったミスもなく、発表者の演説で笑っている人もいて、楽しそうな雰囲気でした。やりがいと達成感を感じることができました。

次に、二つ目として、学年発表の劇で「役」を演じたことです。去年は照明だったので、今年は「役」を演じることにしました。大道具さんたちが協力して作った衣装や小道具などを身につけて「役」になりきりました。自分のためにこんなに時間をかけて作ってくれているんだと思うと、セリフを覚えることにも気合が入りました。そして、本番ー。お客さんがいて緊張しました。セリフがとばないかと心配していましたが、体育館の明かりは消え、照明だけがステージを照らし、観客席は暗がりとなっていました。結果、お客さんの顔が見えず、練習通り落ち着いて演じ切りました。劇が終わった後は、「もう終わりか。」とか「まだやっていたいな。」という気持ちが溢れてきました。練習量の多さで集中力が途切れたこともありましたが、本番は楽しくえんじることができました。

最後に、三つ目として、自分が「役」をしていない時も楽しめたということがあります。他の学年の発表、合唱を聞く「役」にまわっても「聞く」ということを楽しみました。棒読みや滑舌が悪くてうまく聞き取れなかった一年生の劇も、序盤に大爆笑を取りながら終始笑えた二年生の劇も、それぞれに味があってとてもおもしろかったです。

今年は例年より、仕事が多くて大変だった分、楽しむことができたと思っています。こんな風に最後の文化祭を終えることができたことがうれしかったです。「役」を終えて、満ち足りた気分になりました。

感謝　　三年　　山本　翔太郎

楽しいだけじゃない。感謝の気持ちを伝えることも大事だと知った。楽しい文化祭だった。アトラクションをはじめとして、どれも面白かった。僕らが中心として作り上げた文化祭だったから、成功してくれて、すごくうれしかったという気持ちもある。また、今年の劇、人形館で、僕が演じた役は、セリフも多く、難しい役だった。それを演じきったことにも充実感を味わった。最後の文化祭にふさわしい、最高の文化祭となった。

しかし、その中にも、特に心に残ったものは、アトラクションでも劇でもない。一番心に残ったものは意見発表だった。特に藤村さんのスピーチが心に残った。楽しむことを中心に構成されている文化祭の中で、あのスピーチは、輝きを放っていた。内容はこうだ。藤村さんの実体験をもとに、身近な人への感謝を語ったものである。実体験を基に書いていたため、説得力があり、とても感心した。最初は、意見発表なんて、ねむいだけだと思っていた。しかし、いざ聞いてみるとすごくいい作文だった。自分の身近な人への感謝が分かりやすく語られており、自分も考えさせられた。自分が感謝するとすると、誰か・・・。こう考えた時、自分のクラスや両親が浮かんだ。文化祭をこうして成功させられたのも、友人のおかげであり、友人がいるから、こうやって楽しい文化祭にすることができる。そう考えると、友人の存在の偉大さを知ったし、残り少ない中学校生活は、友人に感謝して過ごそうと思った。家族への感謝に対しては、いうまでもないだろう。１５年間、育ててくれたのだから。

平成最後の文化祭であり、義務教育最後の文化祭であった今年。文化祭とは、楽しいものでもあるが、このように教訓を学ぶこととしても存在するということを知った。僕はこれから、友人や家族に、義務教育最後の感謝をこめて、精一杯恩返ししていきたい。